
僕の恋愛

tis

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕の恋愛

【Nコード】

N4503F

【作者名】

t i s

【あらすじ】

アラタの恋愛を描いた小説です。けっして幸せばっかりな話ではありません。

エピソード

きっと僕には本気の恋人はできないだろう。

僕の名前はアラタ。自分では普通の人だと思ってる。特にどこが目立った欠点があるとも思わない。

顔も普通だと思う。カッコいいわけじゃないけども、性格はホレっぽい。

だからこんな恋愛しか出来ないのかもしれない。

幼稚園の思い出

初恋は幼稚園の時。冗談みたいに思えるけど、好きな子がいた。なにがきつかけとかじゃなく、気になった。

「ユウコちゃん遊ば！」一言こっぴどい。ずっと思ってる。

でも、言えるわけない。だって、みんなからかわれるし、そうになったらきつと遊んでくれない。その前に、僕のことキライかもしれない。

もし、キライならそんなこと知りたくないよ。

「アラタくん！遊ば。」

「うん！遊ば。」同じ梅組のタカシくんが誘ってくれた。

「でっかいお城を作ろう！」

「トンネルも！」

僕とタカシくんは砂場でお城を作るのが大好きだ。

今日の砂場の砂は昨日雨が降ったせいかすごく固い。

こんな時は水をかけると柔らかくなるんだ。

でも、うまく固まらなくなるから水は使いたくないんだけど。

「アラタくん、水持ってきたよ」

「じゃあ、僕は形を作るね」

タカシくんが砂場に水をかけてくれた。

僕は一生懸命形を作った。

一通り水をかけるとたかしくんも手伝ってくれた。

でも、やっぱりうまく固まらないな。

「固まらないね」

「トンネル掘れないね」そんな風に話しながらお城を作ってたけど、

もうお城にならないから泥遊びに変わったんだ。

だって、もうドロドロに汚れたし。

お団子を二つ作ったとき、女の子のグループが教室から出てきたのが見えた。

あ、ユウコちゃんもいる。

こっちにこないかな。

「あ、お団子作ってる！」

アキナちゃんはお団子作るのうまいよな。

「あたしもやりたい！」ヨシエちゃんがこういったら、ユウコちゃんも一緒に来るかも。

「まーぜーて！」

ユウコちゃんと泥遊び出来る！

「いーいーよ！」

女の子っていうか、ユウコちゃんと一緒にする泥遊びってなんて楽しいんだろう！

タカシくんと一緒にするより、ずっと楽しくて、ウキウキする！こんな時間がずっと続けばいいのに。

ところで、女の子ってなんてきれいなお団子作るんだろう！

きれいにまんまるになってて、どこから持ってきたのか、白い砂で周りを固めてる。

僕のぐちゃぐちゃのお団子とは大違いだ。

大違いといえば男の子と女の子はお団子作った後の遊び方。

男の子はすごく固く作って、作った後はそれを地面に投げつけて遊ぶ。堅ければ堅いほど、地面で壊れたときの感触が足から伝わって気持ちいい。

女の子はたいがいおままごと。今日も当然始まった。「お母さんはあたしやりたい！」

ヨシエちゃんが言った。

「じゃあ、あたしは子供ね。」

ユウコちゃんと言った。

「あたしも子供！タカシくんと、アラタくんはどうしよう？」

ユウコちゃんがお母さんじゃなかったら何役でもいいや。

「タカシくんはお父さんやって。アラタくんは子供役ね。」

ヨシエちゃんがいった。

本当はユウコちゃんとお父さんとお母さん役をやりたかったな。

「じゃあ、はじめるよ。」

「ただいま。」

「お帰りなさい。」

「お風呂にする？ご飯にする？」

「じゃあ、ご飯にしよう。」

「子供たちは帰ってないのか？」

おままことは楽しい。

家ではお父さんとお母さんはこんな会話はしない。

みんなの家ではこんな会話してるのかな。

「お父さん、お帰りなさい。」

「お帰り〜！」

ユウコちゃんが、一番上のお姉ちゃん役で、アキナちゃんが一番下の妹、僕はそれにはさまれた真ん中だ。

おままごとって、意外とみんな役になりきろうとするから、ユウコちゃんはみんなの面倒を見てくれた。

しまった。もし、僕が一番上のお兄ちゃんになってれば、ユウコちゃんのお世話できた。

「三人ともご飯よ！」

なぜか、ヨシエちゃんのお母さん役は本当にお母さんみたいな気持ちになる。

地面に、「台所」とかいてその場所に、さっきのお団子が並べら

れた。

ヨシエちゃんのところには、ヨシエちゃんの、タカシくんのところにはタカシくんのお団子が並べられた。

この調子だと、あの汚いお団子は僕のところには並べられる。よかった。ユウコちゃんにあんなきたないお団子並べられたくないもんな。

でも、お母さんは僕のところにはアキナちゃんを作ったお団子を、ユウコちゃんには僕が作ったお団子を、アキナちゃんにはユウコちゃんが作ったお団子を並べた。

「これ、誰が作ったの？」

「きたない！」

「あたし、こんなのつくってないもん！」

僕のお団子は女の子から嫌われた。当然だ。僕だってこんなの食べたくないもん。

「もうやだ。教室はいろ？」

その一言でおままごとは終わった。

僕とタカシくんを残して女の子は教室に入ってしまった。

僕のお団子が、悪かったの？でも、お団子おいたのはヨシエちゃんなのに。

ユウコちゃんごめんね。

タカシくんは僕が落ち込んでるの気づいたのかな。

「しょうがないよ。またお城を作ろう。」

こういつてタカシくんはまた水を汲みに行ってくれた。

初恋の続き

僕は小学校に上がった。

といっても、校舎は同じ敷地にあるので通う距離にさほど変わり
はなかった。

幼稚園と一緒に通っていたクラスメートに他の保育所から数人加
わっただけでそれほど変わった事はない。

もちろん、ユウコちゃんへの恋心も変わらなかった。

そして、小学校5年生の秋のこと。

今日は、冬にある学習発表会でする劇のことを話し合う日。

もうやる劇は決まっていたので後は役を決めるだけになっていた。

僕は、主人公はやりたくない。

だって、セリフが多い。

めんどくさい。

先生が教卓に立った。

「今日は劇の役を決めます。全部立候補で決めるからどんどん手
を上げてね！」

誰があげるか！

僕はあまった役でいいや。

台本は全部読んである。

前半は主人公と奥さんと子供の3人だけしか出ない。

ということは、セリフが多いってことじゃん！

「じゃあ、奥さんはユウコちゃんに決定します。はい、拍手！」

え！

前半は3人しか出ない。ということはユウコちゃんと一緒に劇が
出来るじゃん！！

「次は前半の主人公を決めます」

次々に手があがる。

どうやら、これが競争率ってやつなんだろう。

僕も当然手をあげた。

ちよつと前と考えてることが違うって？

だってこんな機会もないよ。

「主人公は人数が多いね。じゃあ、みんなでセリフを読んでよかつた人に決めましょう。」

みんなは一生懸命セリフを読んでいる。

僕の番になった。

ユウコちゃんと一緒に劇が出来る！

僕は一生懸命セリフを読んだ。

読んでみてわかったけど、この主人公は何もしてないのに殿様に人柱にされるかわいそうな村人。

そう思ったら余計にセリフに力が入った。

「アラタくんがいいと思います。」

「僕もそう思います。」

「私もそう思います。」

先生は、考えるまでもなく

「アラタくんに前半の主人公をやってもらいます。」
と言った。

やった！これでユウコちゃんといっしょだ！

練習中は緊張しっぱなしだった。

子供役にはサヤカちゃん。

せめて男の子にして欲しかった。

女の子とろくに話したことがないのに、この状況は辛い。

「えっと・・・練習しよっか。」

ユウコちゃんが僕を促した。

「うん。」

今の僕にはこういうのが精一杯。

練習していると本当にこの主人公がかわいそうになってくる。
病気の子供がいるのに、奥さんを残して人柱にされるなんて。
ユウコちゃんは主人公のことどう思ってるんだろう。

僕はうまく練習ができなかった。

人柱にされる時、奥さんに「俺はどうすればいいんだ!」と、肩
を持って奥さんに詰め寄るシーンがある。

・・無理。

一度先生がやってきて「コレくらい肩を持って!」といってユウ
コちゃんの両肩を持たされた。

僕は真っ赤になってしまった。

「コレくらいやりなさい。」

といって、先生は笑いながら去っていった。

絶対楽しんでる。

それ以来僕はなんとか片手でユウコちゃんのかたを持てるように
なった。

それにしても、本当にユウコちゃんと一緒にいれるなんて夢のよ
うだ。

でも、それも明日まで。

明日が終わったらきつと今までと変わらない毎日が始まるんだろ
う。

いやだな。

本番当日。

僕は一番の出来だった。
と思う。

正直覚えてない。

たくさん観客がいる中でユウコちゃんと劇をしたんだ。
緊張しっぱなしだった。

練習から楽しかったけど、緊張のほうが多い毎日だったな。

明日からきつと、今までと同じ毎日が始まるんだろっ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4503f/>

僕の恋愛

2010年12月31日02時34分発行